



小嶋一浩 先生

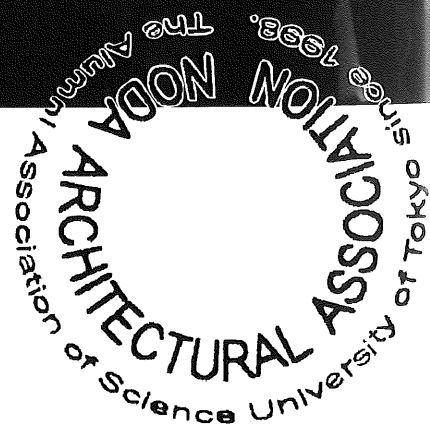


奥田宗幸 先生

野田建築会会報 2011 春号

NAA NEWSLETTER 11 SPRING

VOL.25



建築との出会い

東京理科大学理工学部教授 奥田 宗幸

私が東京理科大学に赴任したのは1974年で、それから36年経つ。私が初めて建築を意識したのは、中学生の時である。当時私は新宿に住んでいたが、歌舞伎町の映画館で、通常の上映時間より前の早朝に映画を観賞するという校外学習があった。その時見た映画で今でも覚えているのは、“ぼくの伯父さん”である。舞台はハイテックな住宅にモダンなインテリア、そこで繰り広げられる生活も目新しかった。その住宅とは対比的な、下町にある古いアパートマンの中を主人公が動く姿が断面図のように表現され、印象的であった。全編に流れていた音楽も軽妙で、今でも口ずさむことができる。

高校生の時、図書館にある建築作品集で丹下健三の卒業設計を見た。当時、建築に興味があった訳でもないのに、何故それを見ることになったのか思い出せない。1964年、大学1年生の時、東京オリンピックが開催されたが、丹下健三が設計した国立代々木競技場は、私がそれまでに持っていた建築の概念を超えていた。数年後、大学院の授業で丹下先生の授業科目を選択し、目の前に立っている建築家・丹下健三を見て感動した。

大学の1年時は教養課程で、建築の講義は一つも無かった。であるのに無謀にも、大学祭の時、1年生の建築学科の有志が集まり、伊東忠太を研究しパネル展示を行った。怖いもの知らずの新入生だった。

2人の恩師—池辺先生とアンジェロ・マンジャロツティ

建築に関する恩師は二人いる。一人は池辺陽先生である。大学院の修士課程と博士課程を池辺研究室で過ごした。研究室で毎週1回行われるミーティングでは、院生は担当していた研究や設計のプロジェクトの作業の進捗状況を報告し、先生を交えてディスカッションが進められた。成果として雑誌に掲載された研究や設計のリポートは内容に富む魅力ある特集になった。

しかし、それまでの作業や討論は地道に泥臭く行われた。研究や設計において恣意的な解釈は許されず、あらゆるアイデア、可能性、選択肢が提出され検討された。設計を行う際には、

機能条件サブシステム、生産条件サブシステム、両者をコーディネートする設計条件サブシステム、それらの前提となる社会システムを検討することを学んだ。私たち院生は、自主的に原著の講読ゼミを開いた。“Hidden Dimension”や“A PATTERN LANGUAGE”が記憶に残っている。

もう一人の恩師は、イタリアの建築家アンジェロ・マンジャロツティ (A.M) である。学部生の時、雑誌でA.M設計のバラザータの教会を見て、このような建築もあるのだと思った。後年、1983年に、在外研究員としてミラノにあるStudio Mangiarottiに行った。A.Mが事務所にいる時は、長い机の上に黄色のロールトレペを出し、立ったまま、色鉛筆を使ってエスキスをしていた。当時すでに世界的な建築家になっていたA.Mが、一心不乱に真摯にエスキスをしていたのが感動的であった。所員は定刻が来ると、「チャオ」と言って帰ってしまう。日本の事務所のように残業はしない。しかし、A.Mだけは残って仕事を続けていた。私は日本の習慣で残っていて、A.Mと私の二人だけが事務所にいたことが何度かあった。A.Mは日本建築に造詣が深く、伊勢神宮、桂離宮、妻籠について話したことが思い出される。A.Mは2月26日で90歳になるが、現役の建築家である。A.Mとのコミュニケーションは今でも続いており、現在、A.Mと私たち日本人との共著で、「(仮題)マンジャロツティの軌跡—日本人建築家達とともに」を出版する作業を進めている。この本が上梓されたら、是非読んで頂きたい。

<略歴>

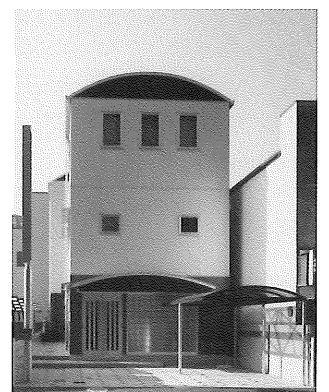
- 1944年 門司で生まれて直ぐに東京に転居
- 1968年 横浜国立大学工学部建築学科卒業
- 1970年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
- 1973年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、工学博士
東京大学生産技術研究所 研究嘱託
- 1974年 東京理科大学助手
- 1976年 東京理科大学講師
- 1978年 東京理科大学助教授
- 1983年 在外研究員としてミラノのマンジャロツティ事務所に滞在
- 1992年 東京理科大学教授



池辺研究室にて (1973年)



奥田研究室設計：perenne Ai



奥田研究室設計：ENU「苑有」



ミラノにてA.Mと (1983年)



奥田研究室設計：ONU House

奥田宗幸先生の退官に寄せて

歴代助手（助教）が語る研究室の歴史

■昭和末期における研究室 西倉一光（1981年院修了）

奥田先生には、昭和54年～56年の2年間に大学院生として、また昭和59年～62年の約3年間は研究室の助手として大学では合計5年間お世話になりました。

昭和末期、今から約四半世紀前の研究室では、PCが導入された初期の頃で、研究室には1台しか無かったと記憶しています。アンケート等の研究データの分析手法には多変量解析を利用しておりましたが、東京大学の大型コンピューターで分析処理をしていました。CADも大学にCADM（IBM）が導入された時期で、建築設計向きのソフトではなく、3Dイメージの補助的な利用でした。現在の研究室や建築設計プレゼンテーションでは想像もできない環境での研究でした。ちなみに冷房は学科事務室にしかありませんでした。

（1981年大学院修了、1984～87年助手、（株）松田平田に勤務）

■まだまだ！これから！ 加地正人（1987年卒）

「研究室のメンバーは家族のようにありがたい」－奥田先生が卒論のオリエンテーションでおっしゃったこの言葉を昨日のように思い出します。ご自宅での新年会には学生の時からお招きいただき、あるときは飲み過ぎて朝食まで頂いて帰ったこともありました。助手を離職した後も折に触れお声をかけて頂き、今も家族ぐるみでお付き合いさせて頂いております。



私が在職しておりました1987～90年は、研究室では研究の他に設計も行っていました。当時の主な研究テーマはCAD・建築のIT化・設計プロセスでした。CADやITと言えば今ではあたり前ですが、当時は何をすべきかその方向性を見出すことすら困難でした。設計は作品性よりも検証や試験的要素がありました。研究対象でもあったCADは早くから設計に活用されていました。設計が長引いて先生とともに研究室で朝を迎えることもありました。

研究室初の海外視察旅行に香港にも行きました。シドニーで行われた国際学会で論文を発表する機会も頂きました。研究室の仲間たちと過ごしたかけがえない思い出です。

私は卒業してすぐに助手になりましたので、奥田先生が人生最初の上司にあたります。この頃先生から教えて頂いたことは今でも私の大きな財産となっています。「設計は建築主のためにある」という姿勢は、常に私のモットーとなっています。平均寿命90歳の時代です。まだまだ、これからです。先生のご活躍と充実した人生をご期待申し上げます。深い感謝と尊敬の意を込めて。

（1987年卒、1987～90年助手、建築コンシェルジュ合同会社代表）

■設計三昧の時代 高安重一（1989年卒）

大学卒業後、一年設計事務所に勤務した後、助手の話をしていただきました。設計をしたくて就職したばかりでしたので、大学でも設計に携われることを望んでいましたが、私の在任期間の研究室は設計三昧と言ってもよかったかもしれません。



研究室の皆さんと、新美南吉、中原中也、小町の舎、ヤクルト独身寮、仙台近代文学館などのコンペに参加し、実施設計も毎年とぎれなく行っていました。

当時は手描きの図面からCADに移行した時期であり、研究室も2倍の広さに拡張され、学生が全員研究室にいられるようになって活動が活性化されました。賑やかになった研究室で、1993年、卒論提出間際の夜中にみんなで「ドーハの悲劇」を目の当たりにしたのを昨日の事のように思い出します。

（1989年卒、1990～95年助手、（有）アーキテクチャー・ラボ代表）

■忙しくも充実した日々 佐久間達也（1993年卒）

奥田先生の席はオープンな研究室の中でも少し見えにくいパーティション奥の窓際にあり、先生は研究室に滞在している間いつもワープロに向かっていて、隣の席の私には緊張感がありました。研究室の学生達にとっては週一回のミーティング以外に奥田先生と直接話す機会は少なかったかもしれませんが、先生が大学に不在の時もつねに設計や研究活動について指示があり、研究室にへばりついて時には学生と共に作業し報告するといった、奥田先生と密に連絡を取る毎日だったと記憶しています。

研究室に助手として在籍した5年間はとても忙しく充実した日々でした。たくさんの学生達と知り合えたことは私にとって宝となり、そして厳しくご指導下さり、色々と教えて下さった奥田先生にはとても深く感謝しています。

（1993年卒、95年院修了、1995～2000年助手、一級建築士事務所佐久間達也空間計画所主宰）

■サザンの歌の思い出 山田俊之（1998年卒）

私は、奥田研の5代目助手をつとめまして、この頃の研究室のテーマは転用建築の実態調査、アルミ住宅の居住実験、“scene book”の開発、屋上緑化の設計の体系化など、建築業界での新しい動きに対して、建築計画の立場から研究のテーマとして取り組んでいた時代でした。



実施コンペにも数多く取り組み、星野富弘美術館の設計コンペティションでは著名な建築家の方々の中で入選に入ったことは参加メンバーの自信にもつながりました。海外視察旅行はヨーロッパ、スペインとパリに行くことができ、数多くの建築物を見学できました。また、毎年行われるゼミ合宿の飲み会の最後には先生の好きなサザンを皆で歌ったのが良い思い出です。

（1998年卒、2000年院修了、2000～04年助手、（有）アーキテクチャーラボ副所長）

■心得 齊藤吉己（2001年卒）

奥田先生、学部時代から修士課程、博士課程を経て助手まで、大変お世話になりました。私が奥田研究室への配属を決めたのは、研究室の先輩方が大変生き生きしているなあと思ったのがきっかけでした。今思うと先生は生徒の意思を尊重しながら長所を伸ばしていたように感じます。そして、先生からは建築設計の基本的な心得を教えて頂きました。



一番心に残っているのは、「建築設計に携わるということは大変幸せなことだ。クライアントは人生の中でも一番幸せな時に設計の依頼をするのだから…」という言葉です。先生から学んだ心得を胸に刻みながら現在私は建築設計の仕事に没頭しています。より多くの人の幸せを願いながら…。

（2001年卒、03年院修了、07年4～11月助手、スターディ・スタイル一級建築士事務所に勤務）

■奥田研最後の助教 中畑昌之（2004年卒）

研究室は今年度をもって閉室となりますが、この3年間は、研究活動ばかりではなく、流山おおたかの森インスタレーションや、日本バスケットボールリーグのアリーナ基本構想計画など、活動が収束していくというよりは、むしろ一層外向きに活発化したのではないかと思います。奔放な私の性向に対する、先生の思慮深く、また寛容なご指導に、只々感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



近年、先生はまちづくり等の活動にも取り組んでおられるとお聞きしています。先生の学識や、ご経験が大学という範疇だけでなく、これからは広く市民の方々に還元されることを、お祈りしております。そして、今後とも変わらぬご指導のほどお願い申し上げます。（2004年卒、06年院修了、08～11年奥田研助教）

理科大での17年

東京理科大学理工学部建築学科教授 小嶋一浩

早いもので17年経ちました。私自身が今回大学を移ることにしたときに数えてみて驚いているくらいです。「何で辞めるんだ?」と問いかけてくる人たちも「17年」と聞いたとたん納得してくれます。

東京理科大学理工学部建築学科の先生方は、当初まだ30代半ばだった私に、なんでもどんどん自由にやらせてくれました。大学院修士課程を設計で修了できるように「修士設計」を導入したことをはじめ、4年の設計教育の実質スタジオ制への切り替えや、修士1年の設計スタジオの創設、1年生の授業から図学を外して通年で「空間デザイン及び演習Ⅰ・Ⅱ」という入学直後に模型を作り始めるような演習科目への変更まで、私自身が関わった科目のほぼすべてを「こうやったらもっとおもしろいんじゃないか」と思うように更新しました。

卒業設計や修士設計の公開講評会もその中に入ります。はじめの何年かはそうした教育プログラムの設計と実践を同時にやっていたといってもいい。今の在校生や今年の卒業生からすると「初めからそうだった」と思っているようなことのかなりの部分は他大学に先行して生み出したものなのです。周りの方々の包容力に感謝します。

理科大・理工・建築=デザインに強い

成果はどうだったのでしょうか? 自画自賛をやるつもりはありませんが、卒業後に真摯に設計に取り組み、活躍している人は大変な数になると思います。海外へ行って活動している人も相当数いる。今はアトリエ系事務所で身体的には相当きついプロジェクトやコンペに取り組んでいる人も、近い将来独立して面白い設計を見せてくれるでしょう。

在学中にデザインコンペに勝つ学生も多い。最優秀賞と賞金を獲ってくる学生も増えている。2003年から始まった「卒業設計日本一決定戦」では、8年経過した段階でのデータで、ファイナリスト(毎年10人)進出者合計数10名(工学部学生も一部含まれます)で、全国の大学の中で京都大学と並んで1位です。(出典:「せんだいデザインリーグ2010卒業設計日本一決定戦 Official Book」P.153) そうした学生たちの成果の積み重ねによって、「理科大・理工・建築=デザインに強い」というイメージが世間でも育まれてきているのではないかと思います。

あたりまえのことですが、カリキュラムをいじったからといって、結果がついてくるということではありません。それはせいぜい必要条件でしかなく、あとは、学生たち一人一人の、彼ら自身の問題であり、本人たちにモチベーションや問題意識がなければ何も生まれない。教育の場で私にできることは、せいぜい環境を整えて、後はモチベーションがあがるように、自分自身のおもしろいと思うことやその都度の興味あること、時には困っていることなどを等身大でぶつけていっしょに考えるくらいでしょう。そうした関係の中で、学生たちが「自分でもできるかもしれない」「自分もやってみよう」と考え始めてくれたらもうだいじょうぶ。

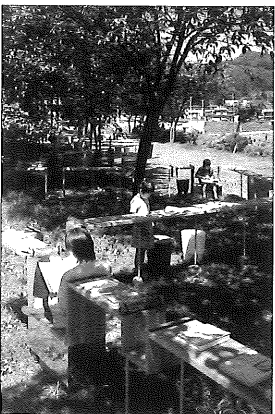
チャレンジは続く

群馬県太田市の「新野脇屋住宅団地」、ベトナムの「ホーチミン建築大学」と2回、大学院で取り組んだ実施コンペで勝ちました。「スペースブロック・ハノイモデル」は、大学院生が実施設計・現場監理まで担当して実現しました。ベネチアビエンナーレに出品した時には大勢で現地へ製作に乗り込み、「アクティビティを設計せよ!」を出版し、「黒/白」などいろいろな理論構築を模索し、もちろん、もっとたくさんのコンペに負けたことなど含めて、意義のあるプロダクトを多く生み出すことができた理科大での17年間でした。それぞれのプロジェクトに参加してくれたみんなに感謝します。

私自身、これから場所を変えて、またいろんなことに心機一転チャレンジしていこうと思っています。みなさんにもどんどん、「いろんなことは変えられるんだ」と考えておもしろいことに取り組んでほしい、と願っています。

<略歴>

- 1958年 大阪府生まれ
- 1982年 京都大学建築学科卒業
- 1984年 東京大学大学院修士課程修了
- 1986年 東京大学大学院博士課程在学中に、伊藤恭行ら7人とシーラカンスを共同設立
- 1988~91年 東京大学建築学科助手
- 1994年 東京理科大学理工学部建築学科助教授
- 1998年 C+Aに改組(パートナー)
- 2005年 東京理科大学理工学部建築学科教授、C+Aに改組
- 2011年 横浜国立大学大学院(Y-GSA)教授に就任予定



越後妻有アートトリエンナーレ出品作である「中里村図書館ファーストステージ」はアーティスト/哲学者であるオル・オグユイベとの共同作品。50日間存在した後、各地を巡回。

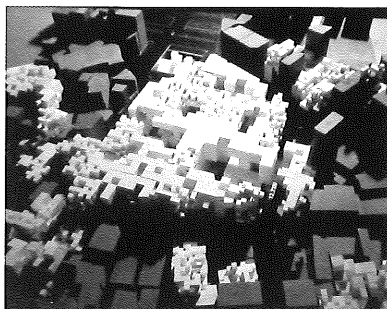


アクティビティの研究も継続したテーマのひとつで、その成果でもあるこの「アクティビティを設計せよ!」(彰国社 2000年)は編集に3年を費やした。後に台湾でも翻訳版が出版された。

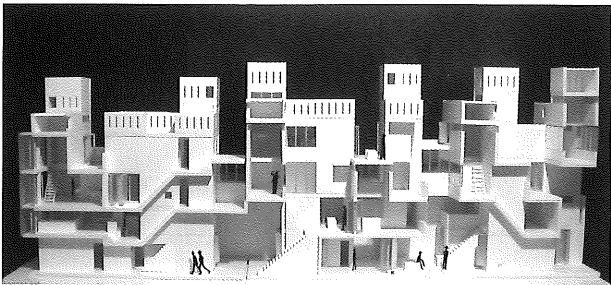
「ハノイモデル」と平行して設計した「スペースブロック・東京モデル」は、構造の専門家とのコラボレーションで水平免震ダンパーとコンピュータ制御のダブルジャロジーを装備した設計。1:10模型で振動実験を行った。日本建築学会設計競技1等案。



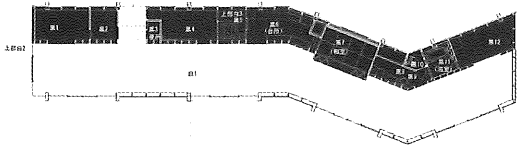
群馬県太田市の「バルタウン城西の杜」は、40haあまりの敷地を戸建て住宅地として設計するコンペで小嶋研が指名されて当選。この「集会場」は成果の一部で学生たちで設計・監理を行った。(写真:上田宏)



小嶋研究室では、「スペースブロック」の研究・リサーチ・設計を継続的に行ってきた。Asia Design Forum1999に招待されて台北旧市街西門地区に対して提示したのが「スペースブロック台北モデル」。台北現代美術館で展示された。



1999年～2003年にかけて現地の調査を踏まえて実施設計・現場監理まで研究室の学生たちと行って実現したのが「スペースブロック・ハノイモデル」である。東京大学曲淵研究室他との共同。



アクティビティ研究を発展させて「黒/白」理論を構築。多くの小嶋の実作にも適用したが、このプランは「ヒムロハウス」



国際コンペで1等となった「ホーチミン建築大学」の最終案。多くの学生が現地にも出向きリサーチや設計に参加した。現在設計を完了し着工のための予算がつくの待っている。(写真：小林浩志)

小嶋研卒業生、17年間の思い出を語る

■小池ひろの（1994年～個人アシスタント、途中から東京理科大学工学部建築学科非常勤講師）

小嶋先生が最初に理科大へいらっしゃった年からご一緒させていただきました。慣れない子育て生活を送っていた私に、奥様である城戸崎さんがアシスタントの仕事を紹介してくださったのでした。それまで殆どお話しした事もなかったので初日は非常に緊張し、何故だかスーツを着ていったのを覚えています。実際お話すると気さくで頭の回転が早く、いろいろな知識の宝庫といった方でした。以降今まで思いがけず長い間お世話になりました。現理科大2号館4階の雰囲気は小嶋先生が徐々に作り替えてきたものです。暗い中廊下を払拭すべく、閲覧室の壁をガラス戸に変え、241教室はオープンになりました。設計を考える場所の環境がまず大切であることも学ばせていただきました。本当にありがとうございます。(KT Architecture 一級建築士事務所：http://www.kt-arch.jp/)

■佐貫大輔（1999年院修了、元助教）

僕が入学した1994年に小嶋さんは理科大にいらっしゃいました。小嶋さんとの最初の出会いは3年生課題の講評会。自分では面白いものを作ったつもりが「ヘタだから全然コワくない」と一蹴されてしまいました。いつかは面白いものを作って見返したい！と思い続け、研究室の門を叩いて以来11年、修士、博士課程、研究室助教と小嶋さんを追いかけ続けてきましたが、未だ背中では遙か前方です。僕は今、小嶋さんとのプロジェクトがきっかけでベトナムにて設計活動をしています。師であり、大きな目標である小嶋さんに僕も負けずにバリバリプロダクトを作っていこうと思います。小嶋先生17年間、本当にお疲れ様でした。(VTN パートナー)

■光本直人（1996年院修了）

小嶋研、C+A、非常勤講師として小嶋研の生徒の中でも長く身近でお付き合いさせていただきました。2号館3階で上原研と部屋を半分づつ共有して始まった小嶋研の1年目を思い出します。当時ポストモダニズムの流行の中で、理論に偏りがちな設計に惹かれていた僕らにとって素直にいい空間とは？と投げかけていただいたことは衝撃的でした。「くうかん」という言葉

を初めて意識した年でした。模型で決定することや実際の空間体験に重点をおいた考えはその後の実際の設計活動の基本となったように思いますし、小嶋研の卒業生にも受け継がれていると感じます。これから横浜国大に行かれても第一線の建築家として、教育者として活躍されることを期待しています。

(株式会社ミハデザイン一級建築士事務所主宰：http://www.mihadesign.com/)

■杉貴子（1997年卒）

新入生のガイダンスで小嶋先生を初めて拝見し、教育者であると同時に実務で活躍されている建築家としての魅力的な存在感に心惹かれました。小嶋先生の授業やゼミを通し、私の建築への興味は次第に増し、建築意匠を職業にすることを決めました。5年ほど前にパリで西沢大良さんが伊東豊雄さんに「小嶋さんは、ご自身の事務所での設計業務の忙しさにも関わらず、学校教育に力を抜くことなく取り組んでいらっしゃる。ご両立されていることに、非常に感心するのです」とお話をされていたのがとても印象的でした。建築家という職業の魅力を教えて下さったことに心より感謝いたしますと同時に、今後の人生の指標にさせていただきます。(Architecte HMONP：フランス国家認定建築家)

■渡邊英徳（1998年院修了）

学部3年次、小嶋先生が理科大にいらした。迷わず小嶋研究室を希望した。平行定規がMacに駆逐されていくさまをリアルタイムに体験した世代である。卒業研究と制作を通して、仮想空間にどっぷりはまった。修士研究で与えられたテーマは「QTVR パノラマを用いた建築空間のサンプリング」。その後も情報空間と取り組み合い続け、現在は情報アーキテクチャのデザインを生業としている。「スペースブロック」をはじめとする当時の仕事を参照するたび、自分たちが在籍した研究室の先進性と、恩師の先見性を感じる。今後も変わらぬご活躍を。(首都大学東京大学院システムデザイン研究科准教授)

■小谷研一（1999年院修了）

小嶋さんとの出会いは、私の建築に対する理解を深め始める大きなインパクトになったと同時に、とにかく実行、という今の私の考え方のスタンスの始まりになるものでした。小嶋さんから何でも吸収したいと思い、言われたことはそのまま実行しようしたり、分からない事は何でも聞こうとしました。もう少し勉強しろと注意されることも多々ありましたが、考えが空回りしている時、冷静で効果的なアドバイスを頂き、その言葉

はいつも私に勇気と前進する力を与えてくれました。今でも何か壁にぶつかると、「やるんだよ!」という小嶋さんの声を思い出しながら自分を奮い立たせています。長い間お疲れ様でした。今後ともご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。(小谷研一建築設計事務所代表: <http://www.k-otani.com/jpn/>)

■岡野道子 (2002 年院修了)

私が大学に入ってから小嶋研究室にいた頃というのは、シーラカンスが北京やカタルで建築をつくり始める頃でした。当時の研究室はシーラカンスの建築を手本にしながら、実験を繰り返す研究所のような雰囲気、その最大の成果はハノイモデルの設計でした。学生の立場を利用して、環境、宗教、土着文化を視察しながら、設備エンジニア等と答えを探り、実際の建築で確認するという大変贅沢なプロジェクトです。これは小嶋さんのお人柄に共感して多くの人が集まってくるからこそ実現できました。今後、さらなる実験的な場を、是非つくっていただきたいと願っております。(株式会社伊東豊雄建築設計事務所)

■社本怜子 (2003 年院修了)

学校や仕事、趣味など色々な場面で沢山の人のに出会いますが、その中でも小嶋さんに出会えたことは私にとってとても幸運で、人生を見つめる大きなきっかけとなりました。

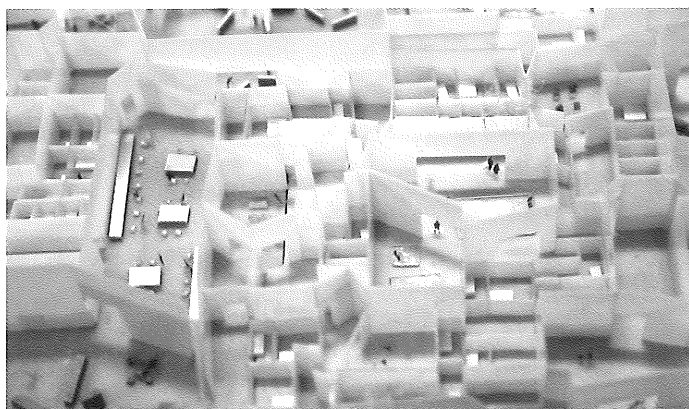
修士の時に経験したベトナム・ハノイでの七ヶ月におよぶ常駐監理は、その先の生き方や考え方を考えるものでした。現場監理がどういうものかも何も分かっていない私は、全力でもがきながら、毎日ない頭を捻っていたのを思い出します。ハノイでの経験が、建築への興味をより大きくさせ、今も建築を続けている大きな要因であると確信しています。

理科大の小嶋研究室を卒業したことに誇りを持ち、建築を続けられることを幸せに思います。(しゃもと建築設計室)

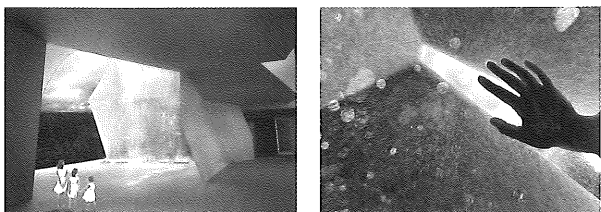
■坂下加代子 (2001 年院修了、現助教)

17 年間、私達の枢機脚でした。おそらくこれからも。小嶋さんから次に生まれる建築、教育を考えるとドキドキします。(中央アーキ共同主宰: <http://www.chuoarchi.com/>)

2010 年度 卒業設計結果発表

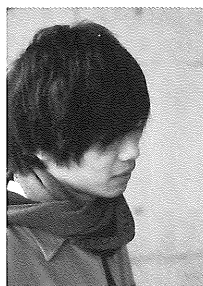


藤代健介 (川向研究室) 作品タイトル: NETWORK VILLAGE



真崎学 (初見研究室) 作品タイトル: 210/365

最優秀賞・藤代健介 (川向研究室)



<作品説明>

情報環境をベースにした新しい行動規律のための未来の神話。「遍在化」、「共有化」を徹底的にドライブさせた時に起きる世界の在り方。ネットワークがあらゆるものを結び、増殖し、浸食する。まるで集落は一つの大きな生命体の様になる。情報空間という別次元の世界を手に入れた私達は再び村に住むことになる。

<受賞コメント>

卒業設計は大学で4年間の中で学んだことの集大成という気持ち強く、自分とは何なのかと向き合う日々が続きました。その結果として最優秀賞という栄えある賞を頂くことができ、光栄です。1年間ご指導して下さった川向先生、時間を割いて来てもらったお手伝いの方々、そして4年間大学に行かせてもらった両親に感謝の意を述べて受賞の言葉とさせていただきます。

優秀賞・真崎学 (初見研究室)



<作品説明>

「三重県尾鷲市須賀利町。ここは雨のまち。210/365 日人々に潤いと憂いを与えている。雨が降り、生み出される光と影。雨音は音楽に、風に揺らぎ雨は不安定に揺れている。目に映る一粒の水滴は吹き抜ける風のように涼しげで、光のように美しい…。」雨の日に行きたい建物をつくろうと思い、雨を建築の構成要素の一つと考え設計を行いました。

<受賞コメント>

建築を学びはじめて、4年。あつという間でした。卒業設計はその4年間の中で、心からものをつくるのがおもしろいと思えた瞬間でした。やっとスタート地点です。ご指導頂いた先生方、先輩、協力してくれた後輩、そしてこれからも切磋琢磨していく友人にこころより感謝したいと思います。

武田研究室卒業生の会『たけのこ会』発足

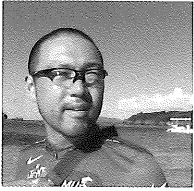
2010年3月に退官した武田仁先生研究室のOB会『たけのこ会』(会員総数:535名)が発足し、2011年2月12日に第一回総会が理窓会館で開催されました。武田先生(名誉会長)をはじめ、岩浪会長(S51年卒)、瀬沼副会長(同53)、佐藤幹事長(同51)、田上(同54)、鈴木(同57)、木口(同54)、広川(同57)の役員を含め22名が出席しました。

第一回表彰で、江藤(同54)と木口(前出)の2名が表彰されました。『たけのこ会』ホームページ(現在199名にIDが交付され運用開始、<http://takenoko.me/>)の説明(木口、広川)、鈴木、田上、江藤の記念講演もあり、終始和やかな雰囲気の中で閉会しました。(瀬沼央)



「OB と語る会」レポート(2010年11月5日)

建築におけるシンボル性の再考



遠藤 隆洋 (えんどう たかひろ)
 1978年 東京都生まれ
 2000年 東京理科大学工学部建築学科卒業
 2002年 同大学大学院修了(小嶋研究室)
 2004年 山本理顕設計工場入所

遠藤氏は、理科大の大学院(小嶋研究室)を修了され、現在は山本理顕設計工場にご勤務されています。山本理顕設計工場の建築作品は、メディアに露出する機会も多く、私も建築雑誌を通じて拝見しておりましたが、氏が今まで関わってこられたプロジェクトの一覧を見ると、その主要作品のほとんどを網羅しており、そのご活躍ぶりがうかがえました。

その中でも、氏は、「官園集合住宅」と「C project」の2つに関して、特に時間をかけて説明して下さいました。官園集合住宅は、北京にある集合住宅と低層の店舗からなる施設です。ゆるやかにカーブした輪郭を持った建物が細長い敷地に流れるように分散配置され、敷地中央を貫く通りに特徴のある豊かな奥行き感を与えています。また敷地中央には起伏のある広場があり、建物の様々な高さをランドスケープとして連続させることによって、集合住宅を周辺環境とつながりのあるものにするという意図が伝わってきました。

「C project」は、東京都に計画された専門学校のプロジェクトで、当初は、低層のランドスケープのような建物を目指して計画はスタートしましたが、緩やかなカーブを持った壁がうねるように連続し絡み合う案へと進化していく様子が分かりました。これからの学校建築のあり方、それを実現する強いシステムを目指してトライ&エラーを繰り返す過程が、膨大な量のスタディモデルによって示されました。その結果、アウトプットは、学校のようなある大きさの機能が反復していくようなビルディングタイプに対する、鮮やかな解法として示されていたと思います。

また氏は、新しい建築のシステムを一から考えることで、それが現代のシンボル性というものを見直す契機になりうるのではないかということ、このレクチャーを通して話して下さいました。

(文責 井上研究室助教 小林謙介、奥田研究室 中畑昌之)

構造設計の前線から



渡邊 秀幸 (わたなべ ひでゆき)
 1962年 山梨県生まれ
 1984年 東京理科大学工学部建築学科卒業
 1985年 同大学研究生
 1988年 同大学大学院修了(富澤研究室)
 1988年 竹中工務店入社

渡邊氏は、富澤研究室のご出身で、現在は、竹中工務店東京本店設計部構造部門グループリーダーとして、構造設計に携わっております。

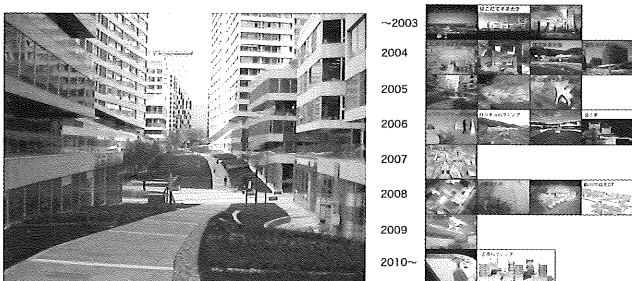
今回のOBと語る会では、氏が関わっておられるプロジェクトの紹介を中心にお話下さいました。

高雄ワールドゲームメインスタジアム(建築設計管理:伊東豊雄建築設計事務所、構造設計管理:竹中工務店)では、21世紀型の新たなスタジアムとするために、「オープンスタジアム」「アーバン・パーク」「スパイラル連続体」の3つの明快なコンセプトを展開しつつ設計が進められたとのことでした。世界的に活躍する伊東豊雄さんの建築は、従来のものではない幾何学を感じさせる有機的な形態であるため、それを構造として合理化していくためには、構造エンジニアである渡邊氏達との共同作業が非常に重要なのだろうということが、説明を通して感じられました。また、竣工写真からは、シンプルな架構が連続していくダイナミックさと美しさ、スタジアムが都市へと開放されている様子が感じられました。

続いて紹介されたのは、渡邊氏のチームがメインターミナルの外装カーテンウォールの構造設計を担当された、バンコクのスワンナプーム空港(成田空港を凌ぐ東南アジア最大規模の国際ターミナル)に関するスライドでした。この巨大建築の工事には、アメリカやドイツなど様々な国の企業、人々が関わるため、建築にまつわる事以外の心労も多かったとのことでした。

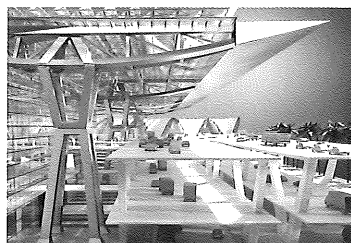
レクチャー終了後、海外で働くことに関する質問が出ましたが、それに対して、外国で暮らし働くことは、苦労も多いが探せるものがある。得難い経験であり、自分はその機会を幸運だと思ってお話になっていたのが、とても力強く印象的でした。

(文責 井上研究室助教 小林謙介、奥田研究室 中畑昌之)

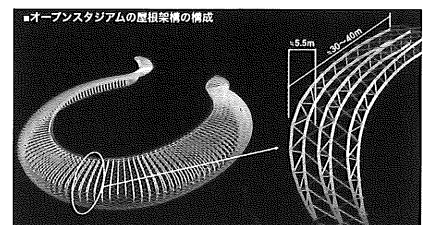


官園集合住宅

遠藤さんが関わったプロジェクト



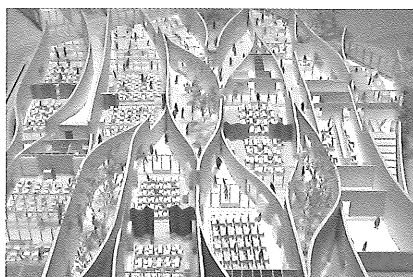
スワンナプーム空港 モデル



高雄スタジアム屋根架構



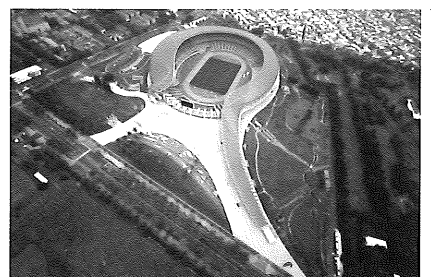
官園集合住宅2



C project



スワンナプーム空港 2004年



高雄スタジアム(台湾)

“でんろく会（野村研究室同窓会）”が5年振りに復活しました！！

衣笠秀行（昭和60年卒）

でんろく会（会長・菊地利武＝昭和46年卒）は、野村設郎先生が理工学部創設間もない昭和43年4月に東京理科大学に赴任され、平成18年3月に退職されるまでの間に先生の研究室を卒業した約350名のOBで構成される同窓会組織です。ちなみに、でんろく会の名称は、設立当初「でんろく豆」を好物にしていた学生さん（楯邦夫さん昭和＝48年卒）がいて、研究室でいつもみんなでポリポリと食べていたからだそうです。でんろく会は、平成18年3月の野村先生定年退職記念パーティに先だって平成17年11月に最後のでんろく会と銘打って開催され、その後、休会状態にありました。

今年で5年を経過し、OBの皆様の強い結束と熱い再開の声によって、平成22年11月20日の土曜日に東

京・新宿で72名の出席者を得て再開されました。再開されたでんろく会は、衣笠研究室の卒業生を含めたおおよそ450名の卒業生からなるOB会となり、今後2年おき（西暦偶数年）に開催される予定です。卒業生の皆様は次回、是非ご参加下さい。でんろく会の連絡用メールアドレスは下記です。

kinugasa555@gmail.com

（この原稿を2011年の仕事始めて書いていたら突然研究室に野村先生が奥様と尋ねていらっしゃいました。先生いつまでもお元気です！！）

（きぬがさ ひでゆき、1985年卒（野村研究室）、1990年院博士課程修了。2008年東京理科大学理工学部建築学科教授）



NAAからのお知らせ

【会費納入のお願い】

野田建築会（NAA）では、会則に則って平成23年度（平成23年4月1日～平成24年3月31日）の普通会员の年会費3000円を徴収しています。会費は会報の発行、OBと語る会の開催、NAAサイトの運営、見学会の開催、NAA賞の授与などの活動費用として有効に使われています。

NAAの発展と活動の活性化を図るために、本年度会費をぜひ、納入いただきますようお願いいたします。つきましては会費納入のための郵便振替用紙を同封いたします。

振込みの時には、封筒の宛名ラベルに記載されているID番号を通信欄に記入願います。

専用の郵便振替用紙がない方も、ページ右下にある郵便振替口座番号から納付することができますので、よろしく願います。

【NAAサイトのお知らせ】

NAAでは、個人情報保護の点から名簿の発行をとりやめましたので、それに代わる情報交換ツールとしてNAAサイトを開設しました。サイトに登録すると、大学の動向をお知らせするメールマガジンも届くようになります。ぜひご登録いただくようお願いいたします。

<http://www.rikadaikenchiku.com/>

【編集後記】

■工学部建築学科同窓会「築理会」の第3回新年会が2011年1月26日に東京・神楽坂の森戸記念館で開催され、野田建築会から千葉が参加しました。会場に行くと、坂口彰氏（1979年卒堀川研、竹中工務店東京本店設計部副部長設計担当、写真右）、栗飯原（あいばら）功一氏（1985年卒井口研、竹中工務店作業所工事部長、写真左）の野田建築会OBとも一緒に、築理会の新年会に野田建築会が合流しても良いかもしれません。

■日本建築家協会（JIA）主催の2010年度「日本建築大賞」に、三分一博志氏（1992年卒初見研）の「犬島アートプロジェクト『精錬所』」が選ばれました。おめでとうございます。

■OBの方々の情報提供をよろしく願います。

（千葉利宏：f-planning@mbr.nifty.com）



野田建築会 会報 11 春号

2011年3月19日

編集：会報部会

編集委員：有岡三恵・小園涼子・高安重一・千葉利宏・中畑昌之・前田智成・横山圭（50音順）

発行：東京理科大学野田建築会

〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641

<http://www.rikadaikenchiku.com>

郵便振替 口座番号 00130-9-27644 東京理科大学野田建築会